

中国人の日本語学習における 誤りの共有と学びあいによる協働学習

張 莉*1・北 英彦*1・下村 勉*2

Email: 416001A@m.mie-u.ac.jp

*1: 三重大学工学研究科電気電子専攻

*2: 三重大学教育学部

◎Key Words 協働学習, 日本語学習, 誤りデータベース

1. はじめに

外国語を学ぶ場合には、間違いを恐れるのではなく、間違いから学ぶことが重要である。教育現場では作文における誤用は、教師が添削して、学習者に返却するだけなので、学習者はなぜ間違えたのかわからないままになってしまうことが多い。通常、学習者は誤用が悪いものという認識があるので、誤用をノートに残すことも少ない。そのため、学習者が同じような間違いを何度も起こしてしまう。学習者が自分の誤りを起こさないように、誤りを記録し、いつでも復習できるようにデータベース化することを考える。日本語の誤りのデータベースに関しては、寺村秀夫によって収集された言語研究者のための「外国人学習者の日本語誤用例集」^[1]がある。また、小柳昇、望月圭子によって構築された「オンライン日本語誤用辞典」^[2]は主に日本語教師に向けたもので、日本語学習者も検索して学習できるようなものである。本研究では、専門家が作成したものではなく、学習者が自ら自分の誤りをデータベースに登録し、それを活かして学ぶことに注目する。

一方、中国における日本語教育は、講師が説明するだけの一方的な教育方法で行われている。学習者は受身として聞く、模倣・暗記するなど単調な方法での学習が多く、学習者間の相互性はあまり重視されていない。本研究では、学習者間での間違いに気づき、誤りを共有し、学びあうという協働的な学習を目的とする。

2. 概要

本研究では、中国人日本語中級以上の学習者を対象にして「学習者参画型データベース：学習者が自ら学んだことや創造したことをデータベースに登録し学習成果の共有を図ることをねらいとする」^[3]という考え方にに基づき、学習者の作文における誤用に着目し、学習者参画型の誤りデータベースを設計した。さらに、誤りデータベースを用いて、誤りの共有と学びあいを重視した協働学習法を開発した。本学習法においては学習者たちは自分の書いた作文における間違い互いに指摘して、間違いの原因や正解文について話し合う。それぞれの間違いの正解を理解したうえで、学習者が自分の誤りを自ら誤りデータベースに登録する。この学習を繰り返すことで誤りデータベースを充実していく。その後、学習者は誤りデータベースを利用して復習することができる。

3. 誤りデータベース

本研究では、学習者参画型の誤りデータベースとしては、eラーニングシステムの一つである Moodle^[3]のデータベース機能を用いる。

学習者参画型の誤りデータベースの誤り分類に関しては村田^[5]の分類方法を参考にして、更に細分化したものとした。誤用分類項目の18項目には大きく語彙、文法、表現、その他からなっている。誤りデータベースの項目は、学習者の名前、日付、誤用分類、作文テーマ、誤用内容(誤文、正文、解釈)とした。誤りデータベースに学習者が自ら自分の誤りを蓄積することによって、学習者参画型の誤りデータベースを構築する。

4. 誤りデータベースを用いた協働学習法

学習者参画型の誤りデータベースを用いて、中国人日本語学習者が書いた作文における誤りに着目した協働学習法を開発した。その協働学習法の概念図を図1に示す。

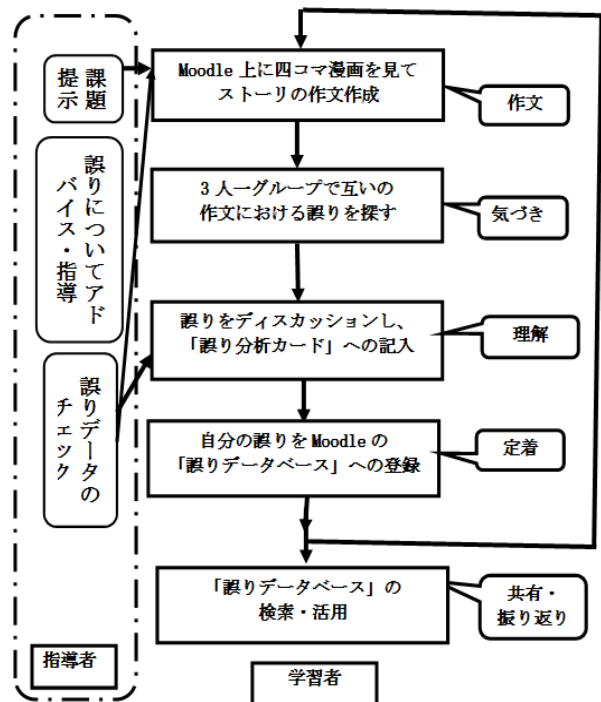


図1 誤りの共有と学びあいを重視した協働学習法の概念図

4.1 作文活動

本研究では、学習者の日本語表現の誤りに着目したため、作文内容の構成、書き方などは問わない。また、学習者の作文負担を軽減するように、図2のような四コマ漫画の作文教材を用意することにした。学習者が作文を書きやすいように、四コマ漫画作文の内容は、学習者たちがよく知っているイソップの物語である。その物語を説明文で表現する。作文の文字は300文字程度に制限した。

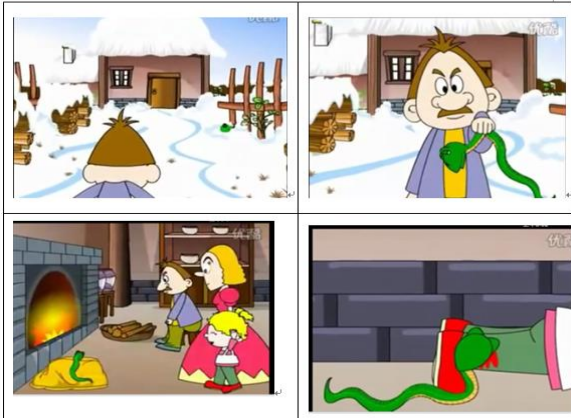


図2 四コマ漫画作文教材一例

4.2 グループによる誤り探し

3人1組のグループで、作文の後、グループ内で互いの作文にある間違いを探しだして、それについて、ディスカッションをして正しい答えをいっしょに考える。

4.3 誤り分析カードの利用

誤りについてディスカッションした結果を図3に示した誤り分析カードに記入する。誤り分析カードの誤文の欄には学習者が探し出した誤り文、疑問を持っている文を記入する。解釈の欄には、誤文に関してなぜ間違えたのか、正文をどのように説明すればわかりやすいかを記入する。

誤り分析カード	
分類項目	
作成者	
誤文	
正文	
解釈	

間違い、発音だと思ふ文を全部誤用文欄に書き出してください。
原因分析：なぜ疑問なのか、なぜ間違いなのか、自分の考え方などを記入ください。
日付：

図3 誤り分析カード

4.4 誤りを誤りデータベースへの記録

学習者が誤り分析カードに記入された自分の誤りを自ら誤りデータベースに登録する。学習者が誤りデータベースに登録した誤りの一例を図4に示す。

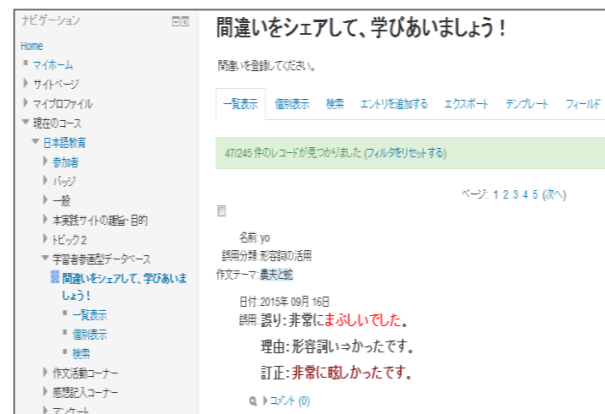


図4 誤りデータベースに登録されたデータ例

4.5 誤りデータベースの利用

誤りデータベースの利用方法に関しては、二つある。一つ目は誤りデータベースによる誤りの共有と学びあいである。二つ目は誤りデータベースによる自分の誤りの振り返りである。

5. 協働学習法の実践

実践対象者は中国人日本語能力が中級以上の学習者11名とした。実践する前、ガイダンスを行い、Moodle上で事前アンケートを実施した。その後、協働学習法に従って実践を行った。全4回の実践が終わった後、誤りデータベースを利用して、誤りの共有と学びあい活動を行う予定であったが、実践するうちに、学習者は前回の実践で起こした誤りを忘れてしまうことがあったため、3回目の実践後、一度誤りの振り返り学習を指示した。その後、4回目の実践を続けた。実践後に、事後アンケートと事後テストを行った。

6. 実践の結果

6.1 誤りデータベース

実践によって構築された学習者参画型の誤りデータベースのデータ数は259件である(2016年1月の時点)。誤りデータベースに登録された誤りの種類別登録数を多いものから順に並び替えたものを図5に示す。

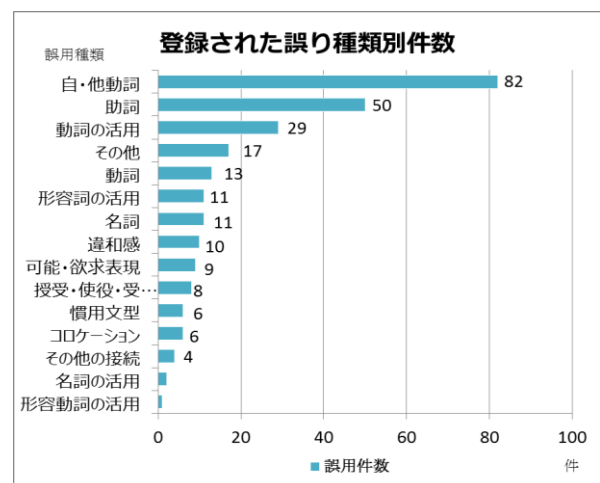


図5 誤りデータベースに登録された誤り種別

分類した 18 種類の誤用項目の中で、上位の 3 種類の誤りは「自・他動詞: 89 件」(誤: 自分で川を渡す→正: 自分で川を渡る)、「助詞: 50 件」(誤: 友達はこの川に溺れた→正: この川で溺れた)、「動詞の活用: 29 件」(誤: 運ぶたい→正: 運びたい)に関する誤りであった。中級以上の日本語学習者にとっても自動詞と他動詞の使い分けが難しいことが分かった。

学習者個々の日本語能力と誤りの件数の関係を図 6 に示す。学習者は日本語国際能力試験の 1 級を合格しているにもかかわらず、作文には誤りの件数が少なくないことがわかった。すなわち、日本語能力 1 級合格者でも、日本語文章作成力の向上に力を入れる必要がある。

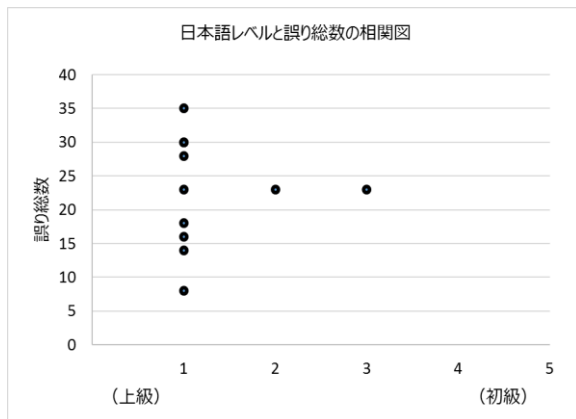


図 6 学習者日本語レベルと誤り件数

6.2 誤り数の変化

4 回の実践における誤り数の変化を図 7 に示す。実践の繰り返しによって誤り数がだんだん減少している。

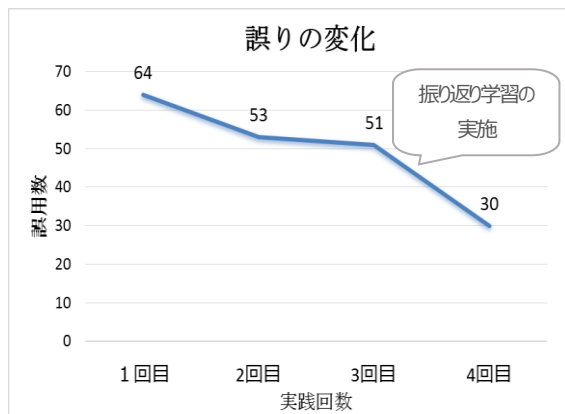


図 7 誤り件数の変化

実践の毎回の作文字数の変化を図 8 に示す。実践の繰り返しによって字数はあまり減少していない。一方、誤りの件数はだんだん減少した。なお、1 回目から 3 回目の間は誤りの減少が少なかったが、3 回目から 4 回目では誤り減少が大きかった。学習者の作文の文字数は毎回同じくらいに関わらず、4 回目の誤りの数が大きく減少したことは、3 回目の実践後に一度、誤りデータベースを活用して振り返り学習を行ったことに関わっている可能性がある。すなわち、振り返り学習が 4 回目の実践に働きかけた可能性がある。

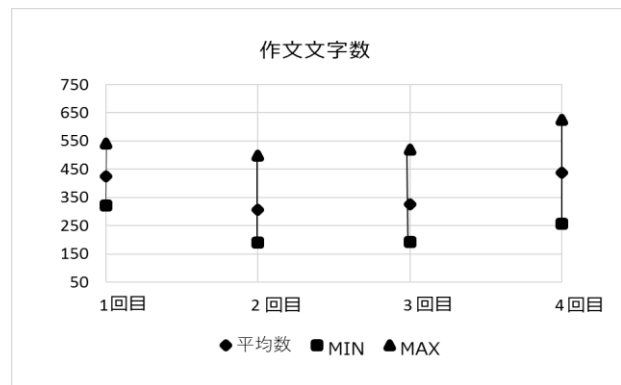


図 8 作文文字数の変化

7. 協働学習法の有効性についての検討

7.1 誤りに着目することの適切さ

誤りは悪いものというイメージがあるので、学習者は自分の誤りを他人に知られることに抵抗感があるのではないかと予想した。しかし、事前アンケートの結果には、予想に反して、90%以上の学習者は抵抗感があまりないと答えた。そこで、本協働学習法が誤りに着目することは、学習者にとって適切であったと推測できる。なお、実践後、一人の学習者は抵抗感が生じた。その理由は自分の誤りが多くて恥ずかしかった。学習者の恥ずかしさを軽減するため、誤りだけを指摘するのではなく、作文のよい点もほめる方法を取り入れることは今後の課題である。

項目	誤り個数	検出(学)	未検出	検出率
1回目	91	64	27	70%
2回目	59	53	6	90%
3回目	66	51	15	77%
4回目	42	30	12	71%

本協働学習法においては、学習者間で誤りを探しだし、正解を探索することであったため、学習者間ではどれくらいの誤り検出率があるかを分析した。誤り個数は日本人 3 名による誤り検出数で、検出(学)は学習者たちが検出した誤り件数である。表に示すようにそれぞれ実践の課題における誤りの検出率が 70%以上であった。つまり、本協働学習法は学習間での誤り検出には効果があると示唆された。しかし、約 30%の誤りが検出されていなかった。学習者が未検出の誤りには、例えば「山田さんと家族がうれしかった」のように文法上の誤りではないが、違和感があるような文があった。それらのような誤りにどのように対応するかは今後の課題とする。

7.2 モニター意識の向上

学習者の「誤りを繰り返さない意識していますか」に関しては、事前・事後アンケート結果を図 9 に示す。「ややはい」から「はい」に変化して答えた学習者が 63.6%であった。実践を通して学習者の自分の誤りを繰り返さない意識が強くなった。「学習者が自分の産出した言語表現が正しいかどうかをチェックする能力、すなわちモニター能力が言語学習において重要で、教師

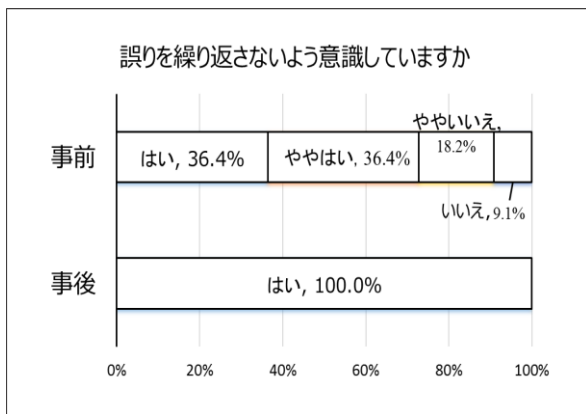


図9 誤りを繰り返さない意識の結果

は訂正活動を意識的もさせることより、学習者が誤りを見過ごさないよう習慣づけの活動をさせるべきである^[6]。本協働学習法では、学習者が誤りを見だし、学びあいのような学習活動の繰り返して誤りを直す意識や繰り返さない意識の向上は学習者のモニター意識が向上したといえる。また、誤りから学ぶことの大切さが実感することができるようになって、学習者のモニター能力の向上にもつながるのではないかと推測できる。

7.3 誤りの共有と学びあい

グループ活動の段階に関しては、学習者から「自分が気づかない誤りを他人によって指摘されて初めてわかった」「誤りについて討論することは理解が深まった」「他人の誤りからも学んで、同じような誤りを起こさないようにしている」「みんな同じような誤りを起こしていることに気づいて、恥ずかしさがなくなった」などのコメントがあった。すなわち、誤りデータベースを利用して、他人と同じような誤りに気づき、不安感が軽減し、学習の機会が増えた。

7.4 誤りの傾向の把握

誤りデータベースの検索活用によって図10に示すように91%の学習者は自分の誤り傾向や特徴に気づいている。学習者は誤りデータベースを利用して、自分の誤りを一覧して振り返ったとき、同じ種類の誤りが何回も登録されていたことに気づき、自分の誤り傾向を認識したと思われる。誤り傾向を認識して、更にモニター意識も働けば、日本語の学習効果があると期待できるのではないかと考えられる。

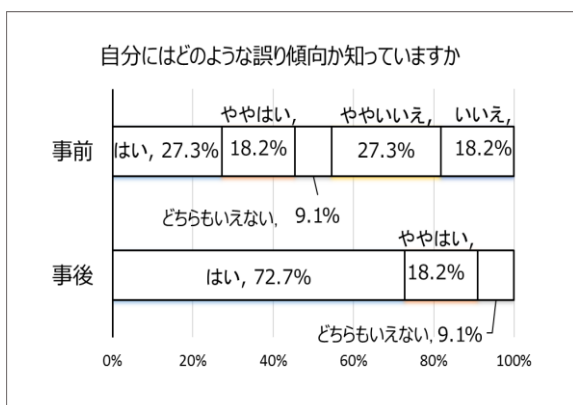


図10 自分の誤り傾向の把握

7.5 学習効果

開発した協働学習法の学習効果をアンケートの結果から判断するだけでは不十分のため、実験者に対して、事前・事後のテストを行った。図11を示すように事後の得点が全体的にあがった。

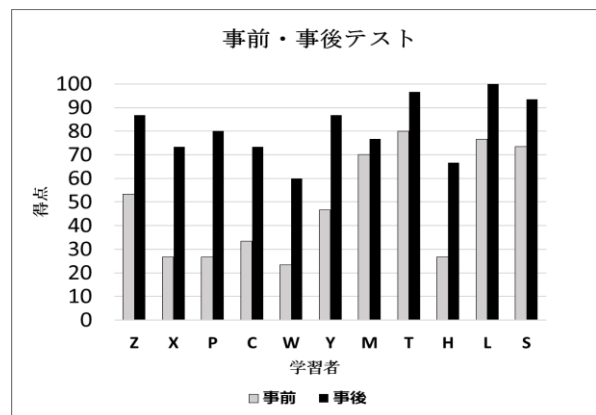


図11 事前・事後テストの比較結果

7.6 満足度

本協働学習法に対する満足度調査を行った結果、91%の学習者はよかったと答えた。それは、学習者は誤りの共有と学び合いによって、誤りから学ぶ大切さを実感でき、自分の誤りの傾向を発見できた。また、誤りから理解が深まったなどが考えられる。

8. おわりに

本研究では中国における受身的な学習とは異なり、学習者の誤りを共有し、学びあう協働学習法を開発し、実践した。

協働学習法に基づいた学習活動を通して、学習者自身が気づかない誤りを他人の指摘によって気づくことができた。自分の誤り傾向を認識して、それを直す意識や他人の誤りから学ぶとする意識が高まった。

実践する対象者や回数を増やして、誤りデータベースの登録データを充実すること、誤りデータベースを用いての振り返りの機会を増やし、学習の定着を強めることなどが今後の課題である。

参考文献

- (1) 寺村秀夫, 外国人学習者の日本語誤用例集, 大阪大学, データベース版国立国語研究所 (2011) [Web版: <http://teramuradb.ninjal.ac.jp/db/>]
- (2) 小柳昇, 望月圭子, オンライン日本語誤用辞典の構築と展望, 国際日本語教育部門3ヶ年プロジェクト成果報告論文集, Vol.2012, pp.45-54, 東京外国語大学国際日本研究センター (2014) [Web版: http://cbllc.tufs.ac.jp/llc/ja_wrong/index.php?m=default]
- (3) <https://moodle.org/course/view.php?id=14>
- (4) 下村勉, ハイパーメディアを用いた学習者参画型データベースの開発と改善法に関する研究, 平成6年科学研究補助金(一般研究C)研究成果報告書(1995)
- (5) 村田明, 留学生の日本語作文に見られる誤り, 信州大学留学生センター紀要第4号(2003)
- (6) 石島満沙子, 中級学習者のスピーチ学習での試み: スピーチ原稿の自己訂正, 北海道大学留学生センター紀要第4号(2000)